

援助職のリカバリー

《12》

～「承認欲求」との闘い～

袴田 洋子

先日、大学院の授業のグループスーパービジョンで、事例提供をしました。スーパーバイザーは、あの奥川幸子先生。初っ端から奥川先生に、「あなた、この仕事、好き？」と質問を受けました。私は、うーん、と考えて、「もう看護師の経験よりケアマネジャーのキャリアの方が長くなってしまっ…今さら、看護師に戻れない、ということ、時々考えたりします…」というような答えをしました。正直、覚えていません。以前からなのですが、好きか、どうか、で、この仕事を考えると、どうにも答えが出てきません。ただ、私自身は、「今、自分の持っているもので、誰かの役に立つことができれば」と、ようやく最近、思うようになりました。「役に立つ」というのは、団先生が言っていた言葉です。専門職の持っているものを振りかざして、相手の役に立たないことをやらかしてしまうことが少なからずある場面を目にしてきて、また、自分もやら

かしてきて、「相手の役に立つことをする」という表現は、援助の業界に身を置く者にとって、非常にわかりやすい言葉ではないかと、最近、思うようになりました。自分は役に立つ人になっているのか、自問自答の日々は、自身の実践を振り返るのに、ちょうどよい言葉のように思います。

称号「〇〇第1号」

訪問看護師として、初めて「地域実践デビュー」した約2年後に介護保険がスタート。管理者として、民間営利企業でのケアマネジャー部門の立ち上げに参加、相談援助職の人生が始まったのもつかの間、社長と大げんかをして社内に居づらくなり、市内の社会福祉法人に就職したものの、またもや上司との人間関係につまずき、短期間で転職を繰り返すことのカッコ悪さを嫌って、平成14年10月、ケアマネジャーとして、自宅で開業した私は、

夫の給料に寄生しながら、「独立開業」という、それほど響きが悪くはないような肩書きを持って、ケアマネジャー業務を行っていました。

ケアマネジャーの報酬は、介護保険法によって決められているのですが、採算は全くとれません。原則的に、指定事業所となるためには、法人格が必要なため、社会保険に加入しなくてはなりません。家賃が発生しない自宅で営業することで、ようやく手取り 20 万円くらい。もちろんボーナスも昇級もなく、大学病院時代の年収と比べると 3 分の 1 程度、情けなくなるほどの役員報酬でした。しかし、「独立型ケアマネジャー朝霞市内第 1 号」というポジショニングは、そのみじめさを巧みにカバーしました。

井の中の蛙「独立ケアマネ」

介護保険がスタートした後（今でも一部では同様だと思いますが）、ケアマネジャーはヘルパーステーションや、デイサービスなどのサービス事業所の「営業マン」的な役割を所属法人から求められていたため、利用者が希望するより過剰に自社サービスをケアプランに組み込むような実践をしている人などもいたようです。自社サービスをケアプランにどれだけ取り入れているかで、所属法人への「貢献度をみる」と言われるなど、利用者の意向より法人の意向を優先せざるを得ないケアマネジャー業界において、「独立型ケアマネジャー」は、その点

では、高い評価を得やすい存在でした。しかし、怪しい部分もたくさんあります。ケアマネジメントというのは、ソーシャルワークの手法のひとつですから、ソーシャルワークを行う実践力が当然求められるわけで、すなわち、アセスメント、面接技法、クライアント理解、家族システム、交渉力、調整力、カウンセリング能力、社会資源調査力などなど、看護師業務とは、まったくの別物です。「相談援助」という「言語で相手を援助する、支援する」ための技術や知識、そして人間力がベースに無くてはならない職業ですが、勢いに任せて、ひとり開業した私は、根拠のない自信のもとに、独立型ケアマネジャーとして、鼻息荒く仕事を続けていました。

ブログで、セキララに自己開示

自宅の一室で、ひっそりと独立ケアマネ業をやっていた平成 17 年 5 月。独立して 3 年が経とうと言う時、小学校からの幼馴染みから「最近、ブログをやっているんだー」と聞きました。私は、脊髄反射的に「あいつに出来るんだったら、私にもきつと出来るはずだ」と考え、自営業の強み（＝自由に時間を使える）（＝仕事時間中でも、ブログでのインターネットでの何でもできる）を生かし、あつと言う間に自分のブログを作りました。ブログのタイトルは、「お気楽独立ケアマネトレーダー日記」。最初は、まったりと自宅でケアマネ業をしながら、ネット

での株取引について、ちょろちょろ書いている程度でしたが、徐々に、未熟者ケアマネジャーの日々の徒然日記となっていきました。そして、正直過ぎるほどに、赤裸裸にケアマネジャーの業務や気持ちを書いていくうちに、徐々にブログを読んでもくれる人が増えていき、Googleで「独立 ケアマネ」で検索をかけると、私のブログが、トップに表示されるようになりました。

ブログで「承認欲求」が緩和！？

ブログを読み、コメントを書いてくれる人が増えてくるにつれ、そこはかとない満足感が生じてきました。いわゆる「承認欲求」が満たされてきたようでした。自分の未熟なケアマネ実践を赤裸裸に綴っているブログを、多くの人が聴いて（読んで）くれるのは、とても気分が良いものでした。当時、私は、自身のことを承認欲求が異常に強いと思っていました。それは、幼い頃、「一人っ子は、わがままで、甘ったれで、泣き虫」と言われ続けたことで、親や大人に甘えないようにして、「一人っ子と思われぬように」を至上命題として、生き続けた名残のせいだと考えました。常に「一人っ子」に見られないように振る舞うことで、ようやく自分は認められるのだ、と子ども時代の思いを言語化した時、ずいぶん頑張って生きて来たのだな、と少し自分を労うことができました。甘えることを封印して生きて来た子ども時

代を送り、頑張った、頑張りが過ぎた、頑張りが過ぎて、大人になった今、少し不器用な生き方になってしまっている自分。だから今度は、少し誰かの助けを借りるのはいいことではないだろうか、と考えて、知人の紹介で、「コーチング」を受けることにしました。プロのコーチの「傾聴」を体験し、「人を褒めること」の影響の大きさを再認識しました。実は、コーチングを受ける前から、ケアマネジャーとして「面接」をしていく中で、「相手を褒める」ということが、援助職にはとても重要だと思っけれども、あまり上手にできない、「相手を褒める」ということに対して、苦手意識があることがわかりました。そして、意識して、利用者やその家族を「褒める」ようにしていきましました。しかし、今、考えると、「相手を褒めなければならない」と意識する限りは、それは、やはり「お世辞」の域を抜けていないように思われ、やっぱり空回りの援助実践だったかな、と、当時を振り返ります。